

「謝罪」のストラテジー：アメリカ TV ドラマに見られる「謝罪」

Strategies of Apology: through observations of an American TV drama

梅田 礼子*
Reiko Umeda

Summary

Strategies of apologizing is context- and culture-sensitive. To know about other cultures in learning a foreign language is important, and yet, takes time. Learning other cultures through watching movies and/or TV dramas would be one of the good ways to learn both a language and a culture.

キーワード：謝罪、ストラテジー、謝罪のモデル

Keywords：apology, strategy, model of apology

1. はじめに

日本の中高大学の英語教育において、会話や読解の学習時間に様々な表現を教えるが、その表現の背後にある文化背景をじっくりと教える時間はなかなか取れないのが現状ではないだろうか。そこで、例えば“*I'm sorry.*”を「すみません」だとのみ暗記してしまい、知人宅を訪問して飲み物を出してもらった時に“*Thank you.*”と言うべきところを“*I'm sorry.*”とってしまうという誤用が生じかねない。また、一般的に「日本人はよく謝るが、欧米人はなかなか謝らない」と言われるが、では実際に謝る場面ではどのように謝るのか、はなかなか学習する機会がない。

しかし、文化や思想、行動様式の学習だけに時間を費やす余裕もまた無いのが現状である。そこで、表現を学ぶ際に、映画やドラマのシーンを通して、その表現が用いられる「場面」、その表現が実際に意味すること、などを確認するという方法が考えられる。本稿では例として「謝罪」を取り上げ、あるドラマのシーンを通じて、どのような手順でどのような表現が用いられているか、を確認し、英語教育や英語学習での、映画やドラマの有用性を考える。

2. 「謝罪」のストラテジー

2.1 Blum-Kulka and Olshtainによる「謝罪」ストラテジーの分類

Blum-Kulka and Olshtain (1984) は「謝罪のストラテジー」について、次の a.b.2 つのどちらか、または両方を取る、として挙げている。a.の方を直接的謝罪としている。

(1) Strategy types

a An explicit illocutionary force indicating device (IFID), which selects a routinized, formulaic expression of regret (a performative verb) such as: (*be*) *sorry*, *apologize*, *regret*, *excuse*, etc.

b. To use an utterance which contains reference to one or more elements from a closed set of specified propositions. The semantic content of these propositions relates to the preconditions (mentioned earlier) which must hold true for the apology act to take place. Thus, an utterance which relates to: (a) the cause for X; (b) S's responsibility for X; (c) S's willingness to offer repairs for X or promise forbearance (that X will never happen again) can serve as an apology.

* 大同大学教養部外国語教室

Blum-Kulka and Olshtain (1984, p.206)

Suszczynska (1999) はこの Blum-Kulka and Olshtain (1984) の分類や Cohen and Olshtain (1981)らの分類を基にして、「謝罪の型」を整理した。

2.2 Suszczynska による「謝罪」モデル

Suszczynska (1999) は次のように「謝罪」について網羅的なモデルを提案している。これらのうちどれを選択するか、は文脈や文化によるが、様々な文化にわたって、ある程度似ているとのことである。Blum-Kulka and Olshtain のモデルに加え、「非を認めない」場合も含めている。

(2) The model of apology by Suszczynska (1999)

1) Illocutionary Force Indicating Devices (IFIDs)

- a. An expression of regret, e.g. *I'm sorry*
- b. An offer of apology, e.g. *I apologize*
- c. A request for forgiveness, e.g. *Excuse me/ Forgive me/ Pardon me*

2) Explanation or Account

Any external mitigating circumstances, “objective” reasons for the violation, e.g. *The traffic was terrible*

3) Taking on Responsibility

- a. Explicit self-blame, e.g. *It is my fault/ my mistake*
- b. Lack of intent, e.g. *I didn't mean it*
- c. Expression of self-deficiency, e.g. *I was confused/ I didn't see you/ I forgot*
- d. Expression of embarrassment, e.g. *I feel awful about it*
- e. Self-dispraise, e.g. *I'm such a dimwit!*
- f. Justify hearer, e.g. *You're right to be angry*
- g. Refusal to acknowledge guilt

Denial of responsibility, e.g. *It wasn't my fault*

Blame the hearer, e.g. *It's your own fault*

Pretend to be offended, e.g. *I'm the one to be offended*

4) Concern for the hearer, e.g. *I hope I didn't upset you/ Are you all right?*

5) Offer of Repair, e.g. *I'll pay for the damage*

6) Promise of Forbearance, e.g. *It won't happen again*

Suszczynska (1999, p.1056)

これらのストラテジーのどれを用い、どの順に述べるか、は文化により異なる。日本では、該当の行為をしてしまった「理由」を長く述べることは「言い訳」と受け取られ、かえって相手の気分を害することも多い。例えば、遅刻の理由としてここで例として挙げられている「渋滞がひどかった」は、友人間では受け入れられるかもしれないが、ビジネスにおいては、渋滞を見越して早めに出るのが当然だと考える相手ならば、「言い訳」にしか聞こえず、ビジネスに支障をきたしかねない。

3. TV ドラマの実例

アメリカ TV コメディドラマ“Big Bang Theory”の謝罪のシーンをいくつか観察する。このドラマはカリフォルニア工科大学に勤める若手研究者シェルドン、レナード、ラージ、ハワードを中心にしており、彼らの研究者ゆえに世間ずれしている感じと、「スターウォーズ」「スタートレック」などの映画やアニメ、コミックにハマっている、いわゆる「オタク」なところを笑いに行っている。中でもシェルドンは天才的だが、人の感情を読むことが苦手で、当人に悪気はないのだが、周囲と様々なトラブルを巻き起こし、それが笑いになっている。

3.1 非を認めることと詫びの順

シーズン9、エピソード13「最適な思いやりの法則」では、シェルドンが風邪をひき、友達が看病してくれた薬を持ってきてくれたりしたのに酷い態度をとった。それでレナードはじめみんな我慢の限界を超え怒っている。シェルドンを除いたみんなでラスベガスに遊びに行く話がまとまる。シェルドンは「病気の時には我儘にしてよい」という前提に立っているため、なぜ友達が怒っているかが理解できていない。シェルドンの彼女エイミーが「相手の気持ちを考えないといけない」と指摘し、ラスベガスに一緒に行きたいのなら友達に謝るべきだ、と諭す。そこでシェルドンは友達に謝罪して回るようになった。ここで、その謝り方を観察する。

(3) レナードに謝るシーン。(9:09~)

Sheldon: You tried to take care of me when I was sick and I was mean to you. There's no excuse for that, and I'm truly sorry.

Leonard: Thank you, I appreciate that.

ここでシェルドンは自分の酷かった態度を認めている。Suszczynska モデルの3) Taking on Responsibility

a. Explicit self-blame にあたる。かつ、述べる順にも注目したい。日本ではまず詫びてから状況説明、の順が好ましいとされる。企業の不祥事会見でも、まず「この度はご迷惑をおかけして申し訳ございません」と述べるのが普通だ。先に状況を長々と述べると、「不誠実」とみなされかねない。しかし、アメリカでは状況を説明することで、当人が自分の引き起こした状況を理解していることを示し、理解できているから反省ができてい、と示す。謝罪を受ける側もそこに納得する。したがって状況説明を先にし、IFID の直接的謝罪の言葉はその後に述べるのが普通である。

(4) ハワードとバーナデットに謝るシーン(10:30~)

S: Howard and Bernadette, you tried to comfort me when I was ill, and I treated you terribly. I'm sorry.

Howard: Wow, I'm impressed.

S: No, no, no. Wait, I'm not done. Allow me to underscore my sentiment with a haunting rendition of Brenda Lee's *I'm Sorry* played on the pan flute... (と言ってフルートを取り出す)

H: (慌てて) Apology accepted!

S: All right. That's eight hours of practice down the drain. さらにTシャツを渡して記念の写真撮影。Tシャツに“Sheldon Cooper apologized to me.” “And he made it all better.”の文字。

ここでも、まずは状況を説明、自分の態度が酷かったと述べることで責任を認めている。さらに、お詫びの曲の演奏、お詫びを示す(つもり)のTシャツ、と、シェルドンなりの Suszczynska モデルの 5) Offer of Repair を行っている。

3.2 謝罪を受ける側の態度

次に、謝罪をされた側がどのように反応するか、も観察する。これは Blum-Kulka and Olshtain のモデル、Suszczynska モデルには含まれていないが、もし英語で会話をする機会があるならば知っておきたいことである。

前述(3)に見られるように、レナードは “Thank you, I appreciate that.” (4)に見られるように、ハワードは “Apology accepted!”と、(曲を吹かれぬように急いで) 応答している。また、シャワー中にシェルドンに謝罪に来られたペニーも “Ok, fine. I accept your apology.”と述べて、謝罪を受け入れている。このように、謝罪された場合は、謝罪を受け入れるかどうか、明確に表明する。日本文化では必ずしも明確にはしない。

もちろん、謝罪を受け入れない場合もありうる。

(5) ラージとエミリーに謝るシーン (12:30~)

S: Raj, you were being a good friend and my illness was no excuse for my behavior. I hope you can accept my apology.

Raj: Of course, I do.

S: Emily, I'm sorry for saying dermatologists aren't real doctors. And I'm sure you're tired of hearing that.

E: Do you honestly think I hear that a lot?

S: Well, I would imagine when your job is popping zits and squirting Botox into old lady faces...

R: Okay. Okay, the point is that we accept your apology.

E: Maybe you do. He just insulted me again.

R: But, he doesn't mean it.

E: Why are you defending him?

S が割って入り、「ラージはエンパシーを示しているんだ」と解説。「謝罪を受け入れて、Tシャツ受け取ってよ」と続ける。

Emily: Well, I don't accept your apology.

R: What are you doing?

E: It's called standing up for myself. You should try it sometime.

このあとラージとエミリーが言い争いになり、エミリーは怒って飛び出して行く。

ここではシェルドンは IFID s のうち、(1c) A request for forgiveness (I hope you can accept my apology.) を用いている。普段から悪気はないが自己中心的なシェルドンが謝ったことにラージは感激気味にすぐ “Okay, the point is that we accept your apology.”と、戸惑うエミリーを差し置いて答え、謝罪を受け入れている。しかし、再度皮膚科医を馬鹿にされたエミリーは “I don't accept your apology.”と、受け入れを拒否している。

日本文化では謝罪された側が、しっかり納得はしていないが、「相手が謝っているのだから」と内心では渋々謝罪を受け入れることがある。納得していないので、後日蒸し返すということが起こりうる。

このエミリーの謝罪拒否シーンに見られるように、アメリカでは相手の謝罪に納得がいかなければ謝罪を受け入れない、という選択肢がある。

その後、ラスベガスに向かおうとする貸し切りバスにシェルドンが隠れていて、再度エミリーに謝罪する。

3.3 謝罪した側の態度

謝罪をされた側は通常、受け入れるかどうか、を明確に表明する。したがって、謝罪を受け入れた後は、その行為について蒸し返さないのが前提である。

前述(3)のレナードへの謝罪の後、シェルドンはこれで許され、週末のラスベガスの旅に自分も参加できると安心する。しかし、レナードから「連れて行けない」と告げられると、次のように答えている。

(6) (語気強く) I apologized and I meant it. I know that we don't play this game very often, but you're doing it wrong.

「本気で謝ったじゃないか」、つまり、気持ちを込めて謝罪をし、君は謝罪を受け入れた (“Thank you, I appreciate that.”) のだから、当然、ラスベガスの旅への参加も許すべきだ、とシェルドンは考えたということだ。これも日本文化と異なる点だろう。日本では詫びた側は、相手が謝罪を受け入れた後も、少なくともしばらくは、下手に出る態度をとる。謝罪を相手が受け入れたのだから対等の立場だ、とすぐには考えにくい。

しかし、このドラマに見られるように、アメリカ文化では、謝罪を相手が受け入れたらそれで事は解決したのであり、蒸し返さない、また、悪いことをした側もそれ以上卑下したり、下手に出たりする必要はないようだ。さらに、相手が蒸し返すと “I said I'm sorry. What do

you want (from me)? と言い返すこともあるようだ。これは日本人には「開き直り」「逆ギレ」としか見えないが、アメリカではそうではない。そもそも「謝罪」が「自分の非を認める」ことであり、相当の覚悟を持って行われる。それを受け入れたならば、もう蒸し返さない、というのが大前提なのである。その前提があるので、蒸し返してまだ文句を言う場合にはこのように「謝罪は済んだ。これ以上どうしろというのだ?」と言い返すこともありうるのだ。

こうした文化の違いも、英語表現と合わせて学習したい、または教えたいところである。

4. 終わりに

言語行動のうち、「謝罪」を取り上げ、アメリカ TV ドラマの謝罪場面をいくつか観察した。“I’m sorry.” “Forgive me.”といった直接的謝罪表現を学習するだけでなく、その言葉と並んで発せられる他の言葉、「状況説明」や「聞き手を正当化すること」「聞き手への気遣い」「修復の申し出」「今後同様のことをしないという約束」なども「謝罪」の大切な構成要素であり、合わせて学習することが必要だ。また、それら様々な表現がどのような順で組み合わされて使用されるか、を知ること重要である。

映画やドラマで特定の語用論的場面を見ることで、例えば「謝罪のストラテジー」が実際にどのような順、表現で用いられるか、を表現だけでなく、表情、イントネーション、態度と共に知ることが出来る。

中学高校だけでなく、大学でも近年は会話、読解などの授業でテキストに沿って学習することで手一杯になりがちで、いろいろな表現が「実際にどのように使われるのか」をじっくりと学習できる時間が少ない。

「謝罪」「依頼」など、日米で文化差があり、表現の誤用や誤解が生じやすい場面だけでも、なるべく実際の使用場面を確認しながら学習させることが理想的である。

参考文献

- 1) Blum-Kulka, Shoshana and Elite Olshtain, 1984. Requests and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns (CCSARP)、Applied Linguistics 5:196-213.
- 2) Malgorzata Suszczynska, 1999. Apologizing in English, Polish and Hungarian: Different languages, different strategies. Journal of Pragmatics 31, pp.1053-1065. 3)

引用資料

- 1) Big Bang Theory: Season 9th season, Episode-13, (2015),